

# 『私とペン習字』

日本ペン習字研究会常任理事

山崎春香(本名 良枝) よしえ  
やまさきしゅんこう



文部科学省後援硬筆・毛筆書写検定岡山県審査委員  
硬筆書写検定1級合格・毛筆書写検定1級合格  
産経書のアート協会副理事長 書のアート展審査員  
日本硬筆アート協会会長  
倉敷市文化連盟理事  
山陽新聞カルチャープラザ(岡山・児島)講師  
リビング新聞カルチャー・はあもにも倉敷講師  
倉敷市・浅口市・総社市公民館などペン習字講師

三菱重工総務部の健康保険事務員で入社、悪筆のコンプレックスで悩みつづけた。職場結婚、退職、一児の母となり、マイホームを夢みて実家でアルバイト。疲れからか激しい頭痛、嘔吐で脳腫瘍の疑いで入院、死をも考えた苦しい一ヶ月があった。この事で何か前向きにがんばりたいと思うようになった。美しい文字にあこがれて、一歳と二歳の子連れで、婦人会主催の小川江南先生のペン習字講座に入会した。今年6月で41年になる。5年目でペンの光5級、ペン字検定一級受験7回。理論毎回合格、実技は6回不合格、7回目に合格証をやと手にした。合格後も一級を、受験しつづけて一級合格証は11枚になり、ペンの光は初段になった。

江南先生の企画で、会長の三上秋果先生を主席講師に、全国に先がけて倉敷支部講習会が開催された。講師岡崎六泉先生は私の清書をご覧になり「何枚書きましたか?」「30枚くらいです」と誇らしくに答えた。先生は「たった30枚ですか!会長三上秋果先生にご指導いただきは失礼かも知れませんが100枚くらいは書かないとね」と。このきびしくもやさしい激励の言葉に奮起し、それから毎日8時間、ペン習字に励んだ。練習することが楽しくなり、その後2年で師範位になり、さらにその2年後に全日本ペン書道展の審査員にご推挙いただいた。遠い道程であった。

指導については江南先生の指導者育成セミナーに参加し、女性の一生をどう生きるか。目標、時間、勤勉、忍耐、継続の大切さを教わり、そしてどんなことにもめげず前進する強い精神力をいただいた。

5歳のお子さんも一人の指導からスタート。現在、山陽新聞カルチャー、公民館など、36クラス。各々にやさしい応援団ともいえるお弟子さん達がいます。毎月4歳から83歳の方々360人との出会いがある。岡山市倉敷市、総社市、浅口市の4市を三菱の軽自動車で、年間約一万九千キロ走行、文字どおり東奔西走である。「がんばったね、すごいね!」と、私の一言が癒しと応援歌になるよう前向きな言葉と笑顔を大切に、生徒さんにも元気が明るさ、楽しさを移していくよう心がけている。いっしょにがんばろうという仲間が増えて、憧れの美しい文字を書くことができ、結果がみえ、生活に役立てば、それぞれに幸せの心が満ち、笑顔があふれる。また、生徒さんから学ぶことも多く、私にも喜びが訪れるような気がする。

指導者育成クラスを設け、門下の人たちの硬筆、ペン習字教室の開設に力を注いだ。10年目の峠田真理子さんを始め、小田春潮さん、師範の門野正子さんなど7人でスタート、7人全員が教室を開設した。順調と思っていた矢先、7人の内4人の方がご相談の上、卒業された。立ち直れない程心が沈み悩んだ。掛けようになる心を奮い立たせ、無我夢中で乗りこえた。歳月を経て、ペンの光でペン習字を継続、ご活躍の様子を拝見するにつけ、指導者育成に力を注いだことに悔いはないと思えるようになった。現在も指導者育成中で、門下生の指導する孫弟子さんは約180人。

38年間、日ペンの行事には全て参加、全日本ペン書道展では、飾り付けから片付けまで、研修大会では、国内はもとより、台湾、中国、アメリカなど100%参加、多くの会員の方々とのお会い、私にとって貴重な学びとなり、先輩の先生方にたくさんのお話を教わった。

会長三上秋果先生は、ひたむきに懸命にペン習字に取り組んでいる私をご覧くださって、ペンの光のたて書き、よこ書きの手本執筆など、激励のお引き立てをいただいた。三上秋果先生ご夫妻、江南先生、そして先輩の水野春月先生をお招きして我が家で会食をした。藤田編集長は「果欄」の取材に我が家を訪ねてくださった。楽しい思い出の一コマである。

四十歩の歩み——彩展では折り折りに楽しみながら精一杯の心をこめて手作りした作品——小さなカードから襖4枚分の屏風——千二百点を展示した。倉敷市立美術館の会場へは日ペン理事長、会長、副会長はじめ北海道から九州まで、各地からご来会、また倉敷支部卒業生など多くの方々と出会い、感激に酔いしれながら楽しい語り合いの時を過ごした。快い興奮と喜びが胸がいっぱいにあふれた。皆様から感動と期待のお声をいただき、使命感が出て仕事が楽しくなり、楽しさと感謝の心を原動力にハードスケジュールも前向きに取り組みそうな気がした。この彩展がきっかけとなり、三月には「暮らしのステンシル雑貨」をブティック社から出版。手づくり金封、手づくり便箋の罫線の引き方など、ペン習字社から出版。手づくりめる本ができたと思う。多くの人たちからお力をいただいた。

両親と離別、生後一ヶ月の私を引きとり、育ててくれた母は九十五歳で他界した。「ありがとう、感謝!」が口ぐせの母は認知症にもかかわらず看護師さんから慕われ敬われた。母から教わった「ありがとう」は幸せを呼ぶ魔法のことばと思える。日々「ありがとう」を心がけている。

江南先生の綿密な計画と発想力でペン習字を通して女性の生き方を教え導き、敷いてくださったレールの上を歩かすようにして精進してきた41年、日ペンの先生方、先輩、同僚、門下の方に支えていただいた。中国硬筆書法協会名誉技術顧問に推戴され、北京人民大会堂の歓迎祝宴、愛知万博の友愛館での作品展示、二度の文部科学大臣賞受賞、一日郵便局長は私の宝となった。今、目の前のことに全力投球、決して諦めず、歩み続け出合いを大切に、感謝を忘れず精進しなければならぬと思う。

日本ペン習字研究会の発展の中で活動させていただいたことは、このごほかに幸せだと思いません。師小川江南先生、日本ペン習字研究会の先生方、事務局、会員の皆様「ありがとうございます」と申し上げますとともに皆様のおかげでのご繁栄、ご健勝をお祈りいたします。